
星のカービィ 毛糸の国の大騒動

暗黒物質

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星のカービィ 毛糸の国の大騒動

【Nコード】

N66470

【作者名】

暗黒物質

【あらすじ】

数々の悪を打ち破ってきたカービィ。しかし今度の舞台はコピー能力の使えない毛糸の国！魔法使いによってバラバラにされた世界を元に戻せるか…？新生星のカービィ改め、毛糸のカービィ、ここに誕生。

プロローグ（前書き）

この小説をご覧頂き、誠にありがとうございます。

この小説はファンフィクション（二次創作）となっておりますので、ご承諾の方よりしくお願いいたします。

では、『星のカービィ 毛糸の国の大騒動』ごゆるりとお楽しみくだされませ。

プロローグ

ーここはあきれる程平和な国、ププランド。

ーまんまるピンクの星のカービィは今日も元氣にお散歩中。

ポテポテポテポテポテ

カービィ「今日もいい天気だなあ〜♪」

するとそこに、美味しそうなトマトが転がってきました。

カービィ「あ！ おいしそうお お腹も減ってるし、いただきますーす！」

カービィがトマトを食べようとしたその時、どこからか、不格好な魔法使いが飛び出てきました。

不格好な魔法使い「！！ それは大切なメタモルトマトでアミーボ！ 食べるなでアミーボ！」

時既に遅し。 もう、トマトはカービィのお腹の中。

カービィ「あーおいしかった ご馳走様♪」

すると突然、不格好な魔法使いの持っていた靴下が光り出し、

カービィ「へっ？ ちょっ！？ うわわわわわ！！！」

カービィを吸い込んでしまいました。

不格好な魔法使い「：ちよつと想定外でアミーボ： まあ支障は無さそうだし、別にいいアミーボ」
不格好な魔法使い「ここから我が壮大な計画のスタートでアミーボ！」

不格好な魔法使いに吸い込まれてしまったカービィ、
吸い込まれたその先は……

（毛糸の国）

ヒュウウウウ　ボテッ！

カービィ「痛っー　ううー　何がどうなったんだ？」

辺りを見渡すカービィ。

カービィ「ウゲッ！！　なんじゃこりやああああ！！！！！」

そこは全てが毛糸と布で出来た世界。
もちもん、カービィの姿形も毛糸に！

カービィ「ヒエエエエエ！！　僕まで家庭科みたいな体にいい！」

訳が分からず、吸い込みをするカービィ。

カービィ「ダメだ…　この体じゃ空気を受けられない…」

すると口の中に違和感が。

カービィ「んん？　モガモガモガ　ぷぺっ」

ごろん

??? 「ふわぁぁ やつとでられた」

カービー「あれまっ！ 君はグーイ！ …どうして僕の口の中に？」

グーイ「もおっ！！ 昨日の夜カービーさんが寝ぼけて『わーい おはぎだー！』とか言って僕を食べちゃったんじゃないですか！」

カービー「ありや？ そうだっけ？」

グーイ「しっかりしてくださいよ！ お陰でこんな訳の分からない世界に…」

ヒュウウウウ ゴチーーン！！

グーイ「がはあ！？」

??? 「ぐはあ！？」

ドサツ

カービー「……今日はよく落ちてくるねえ、」

??? 「いたたたた、 もうっ！ カービーさん！」

カービー「はいっ！？ ワ…ワドルディ？」

ワドルディ「ワ…ワドルディ？ じゃないスよ！」

カービー「あ… えっと… また人を巻き込んだじゃったかな？」

ワドルディ「そうッスよ！ 人が気持ち良く昼寝してたら…」

カービー「あー あの時近くにいたの？ 悪かったね。」

グーイ（他に迷惑掛けすぎ…）

ワドルディ「謝り方軽すぎッスよ！」

カービィ「ええい こうなったら仕方ない！ 3人でこの国から脱出しよう！」

ワドルディ（無視せんという…）

グーイ「脱出って言ってもどうすれば？」

カービィ「まず、町か何か、人の居そうな所を探そう！」

ワドルディ「けっこう知識はあるんスね」

カービィ「（なぜ上から目線？）とにかく、歩こう！」

グーイ「待って！ 何か前からこっちに来てる…」

カービィ&ワドルディ「へ？」

3人が前を見ると、得体の知れない怪物に追いかけられた1人の少年が！！

少年「たっ 助けてええええ！」

カービィ&グーイ&ワドルディ「わわわわわわわわわわ！！！！」

3人も走りだす。

ワドルディ「カービィさん、グーイ、何とかしてくださいよ！ 僕スカだからなんも出来ないっス！」

カービィ「でっ でも僕だって吸い込めないし…！」

グーイ「僕だってコピー持ってないし…」

少年「ひゃあああ！」

4人の足も限界に近づいたその時！

ポンッ！

少年& a m p;グーイ& a m p;ワドルディ「うわっ!!」

3人は驚きの声をあげたが、一番驚いたのはカービィだろう、カービィの体が変形して車になったのだ!

カービィ「なにいいい!？」

カービィ車は3人を乗せて猛スピードで怪物から遠ざかる。

グーイ「速ー もう大丈夫だ」

ワドルディ「さすがカービィさんツスね♪」

カービィ車は3人をおろす。

少年「助けてくれてありがとう。僕は『フラッフ』って言うんだ」

第1話へ続く!!

第1話 「キルトの町」

フラッフ「助けてくれてありがとう。僕はフラッフって言うんだ」
体の汚れを払って言うフラッフ。

グーイ「フラッフさん？ 何であんなのに追いかけてたんですか？」

ワドルディ「ここは何処ッスか？？」

いっぺんに聞かれて困惑するフラッフ。

フラッフ「まっ まあ立ち話も何ですから、『キルトの町』へ行きませんか？」

グーイ「町？」

フラッフ「はいっ 僕のお城もありますし」

ワドルディ「お城持ってるんスか！？」

グーイ「：ってことは王族関係の人？」

フラッフ「王子です」

グーイ「待て待て待て待て待て。新しい情報が多すぎてこんがらがる！」

ワドルディ「：やっとかさ町情報が手に入ったんスから、そのキルトの町へ行きましょうよ」

グーイ「じゃっ、じゃあお願いします！」

フラッフ「では僕に付いて来て：」

カービィ車「ちよっと！ あんたがた！ これどうにかして！！」

カービィはまだ、車の姿のまま。

ワドルディ「：丁度いいツス。カービィさんに乗せてってもらいましょう？」

グーイ「さっき走って足も疲れましたし」

カービィ車「やっ！ だからっ」

グーイとワドルディはフラッフの手を取り、カービィ車の上へ乗る。

カービィ車「ぐえっ！！ 重たいてっ！！」

ワドルディ「さっき走ったじゃないスか」

カービィ車「さっきは無我夢中だったの！ あとお三方、乗るなら中に乗りなさいよ！ せめて！」

グーイ「早く行ってください。りんごあげるから」

グーイはポケット（あるの？）からリンゴを取り出した。

カービィは好物のリンゴに：

カービィ車「今回だからね！」

ワドルディ「切り替え速っっ」

カービィ車は走り出す。

フラッフ「大丈夫なんですか？ これ：」

グーイ& a m p ;ワドルディ「旅にゴタゴタは付き物さ」

なぜか、決めたような顔で言う2人。

2人も一応、旅はしたことはある。ワドルディは「64」で、グーイは「3」で。

〜キルトの町〜

カービィ車「はいさっ！ 付きましたよ！！」

ワドルディ「どもども」

フラッフ「ありがとう、カービィ」

グーイ「お疲れ様。はいリンゴ」

グーイはカービィにリンゴを手渡す。

カービィ車「食べれなあああい！！」

そりゃそうだ。カービィの手はタイヤなのだから。
が、フラッフが言う。

フラッフ「しばらくじっとしてれば、元に戻りますよ。」

カービィ車「……は？」

パッツ！

カービィの姿が元に戻る。

カービィ「先言ってええええええええええ！！」

そう言いながらカービィはリンゴにかぶりつく。

ワドルディ（いやしんぼ…）

グーイ「よく知ってますね？」

フラッフ「僕も同じ様なことはできますから。」

グーイ「またまた新情報！！」

カービィ「あゝおいしかった」

ワドルディ「相変わらず、ここも毛糸と布で出来てるッスねえ…」

すると、どこからか聞き慣れない声が。

「王子ー！！ 王子ー！！」

こっちへやってくる。

「王子ー！！ ご無事で！？」

フラッフ「やあ、ルーム・ウール」

カービィ「ルーム・ウール？」

フラッフ「僕の執事だよ」

グーイ（さすが王子…）

ルーム・ウール「王子！ 大丈夫ですか！？」

フラッフ「大丈夫。この3人が助けてくれたから」

ルーム・ウール「このお三方が！？」

ワドルディ（僕何にもしてないスけど…）

フラッフ「この人がカービィ。こちらがグーイ。茶色いのがワドルディ」

ワドルディ（ちゃっ、茶色！？）

2人は笑いをこらえる。

ルーム・ウール「いやはや、あなた達のおかげで王子は助かりました。何とお礼を申したらいいか！」

カービィ「いや、当然の事をしたまです。フッ」

グーイ（カッコつけちゃって… 体が直なくてテンパってたくせに…）

ワドルディも同じ事を考えていたのか、グーイと目が合い、互いに笑う。

カービィ「何笑ってんのお！」

そしてルーム・ウールが何かを決めたような顔で頭を上げる。

ルーム・ウール「カービィ様ご一行には、お部屋を差し上げます！」

カービィ「ぬ？ 部屋？」

ルーム・ウール「私はマンションの管理人もやっております。ささっこちらへ」

4人はルーム・ウールについて行く。

ワドルディ「それにしてもよく、フラッフさんがピンチってわかったッスね？」

ルーム・ウール「私の第6感が騒いでおりました」

カービィ（大したもんだなあ…）

ルーム・ウール「さっ 着きましたぞ。この中へどうぞ」

カービィ「おおー 広い…」

ワドルディ「家具とかはどこぞ？」

ルーム・ウール「家具でしたら、外にいる、ヌーノ・ウールにお尋ねあれ」

カービィ「家賃は？」

ルーム・ウール「タダでございます」

カービィ「そりゃいい！」

タダと聞いてはしゃぐカービィ。

グーイ「ルーム・ウールさん、僕たちの部屋は？」

ルーム・ウール「現在のところ、カービィさんの部屋に3人同居と

…」

カービー「何っ!？」

ワドルディ「僕は大勢の方が楽しいッス」

ルーム・ウール「ビーズがあればお部屋はお貸しできますが…」

グーイ「ビーズ？」

ルーム・ウール「この国の通貨でございます」

カービー「へえ。 んふわああ 眠い！」

グーイ「もう寝ましょうよ」

ワドルディ「フラッフさんの部屋は？」

フラッフ「僕はお城が」

ワドルディ「そうだったね…」

ルーム・ウール「では、よい夢を」

床についたカービー達。

次回、いよいよアクションシーン(?)が！

第2話に続く!!

第2話 「フラッフのお城で」

コケコッコー!!

鶏の鳴き声が響く。

グーイ「……ううゝ もう朝か…」

一番に起きたのはグーイ。

グーイ「カービィさん、起きてください。朝ですよー」

カービィを起こそうとするグーイ。

カービィ「…うんゝ? おっ!？」

グーイ「?」

カービィ「おはぎだー!!」

グーイ「!!!!!」

カービィはまたおはぎと間違え、グーイを吸い込もうとした。
しかし

カービィ「ほあっ!? この体じゃ吸い込めないんだっ…」

グーイ「(危ない…) カービィさん! これで二度目ですよ!!」

カービィ「おはぎが喋った!!」

グーイ「おはぎじゃないです!! いい加減、目え覚ましてください!!」

ワドルディ「…2人共うるさいッスー」

2人のおはぎ騒動でワドルデイが起きた。

ワドルデイ「朝っぱらから、おはぎおはぎうるさいッスよー 聞いてるだけで胃もたれするッスー」

カービィ「ッスッスッスッスうるさい！」

ワドルデイ「口癖なんスから仕方ないッス」

コンコン

グーイ「誰か来た。 はーい！」

ノックに応じ、扉を開けるグーイ。

ガチャツ

フラッフ「朝からにぎやかだね」

バッチリ目の覚めたフラッフが言う。

ワドルデイ「フラッフさん。もしかして外にも聞こえてたッス？」

フラッフ「まる聞こえだって。パティシエの会話かと思ったよ」

グーイ「パティシエ…」

「ぐう」 誰かのお腹が鳴った。

カービィ「おなか減ったー 朝ご飯はー？」

フラッフ「うん。その為に呼びに来たんだ。さあ僕のお城へ…」

カービィ「気が利くう！！！」

一目散にお城へ走るカービィ。

ワドルディ「速… 消えた…」

フラッフ「食堂の場所分かるのかな？」

グーイ「…あの人なら、匂い辿って行けると思う」

ワドルディ「100%行ける」

3人もお城へ歩き出す。

〽フラッフのお城〽

<食堂>

フラッフ「ここだよ」

グーイ「おお いい匂い…」

ワドルディ「ツス」

3人は食堂の中へ。そこにあの人が…

カービィ「3人共！ 遅いよお！！」

首(?)に前掛けをし、ナイフとフォークを握り絞めて、テーブルに着いているカービィ。

ワドルディ「よく場所分かったツスね？」

カービィ「匂いを辿って！！」

フラッフ(当たった…)

驚き半分、呆れ半分のフラッフ。

カービィ「ご飯まだあー？」

フラッフ「この食堂はバイキング形式だよ」

カービィ「食べ放題！？」

フラッフ「もちろん！」

カービィ「ヤッホーイ！！！！！」

ナイフとフォークを残してどこかへ消えたカービィ。

ワドルディ「全部食べちゃわないスカねえ……？」

グーイ「吸い込み出来ないから」

ワドルディ「そうッスね」

そして3人も朝食を取りに行く。

カービィ「いただきますーす♪」

ワドルディ「量多っ！？」

グーイ「カービィの顔隠れてるよ……」

カービィのお皿には、食べ物が山のように盛られている。

ワドルディ「僕もいただきますーす」

グーイ「いただきますーす」

カービィ・グーイ・ワドルディの3人は食べ始める。

少し深刻な表情になったフラッフが口を開く。

フラッフ「みんな、食べながらでいいから聞いてくれ」

ワドルディ「？」

カービィ「モグ？」

グーイ「どうしたの？ 急に」

フラッフ「この世界のことなんだけど…」

グーイ「毛糸のこと？」

フラッフ「ううん、この世界が毛糸なのはもとからなんだ」

ワドルディ「じゃあ何があったッス？」

少し、考えた顔になるフラッフ。

フラッフ「この世界が、大陸が、1人の魔法使いによって、バラバラにされてしまった」

グーイ&p;ワドルディ「バラバラに！？」

カービィ「（ゴクン）その魔法使いつて杖持ってた！？」

フラッフ「たしか。なんでそれを？」

ワドルディ「僕達をこの世界に連れ込んだ奴ッス！！」

フラッフ「そうなの！？ てっきり他国の人達かと…」

グーイが割って入る。

グーイ「どうして世界をバラバラに？」

フラッフ「分からない。でも元に戻して欲しい。」

ワドルディ「そりゃそうッ」

ワドルディが「ス」を言いかけたその時。

フラッフ「カービィ！！ 僕と一緒にこの世界を元通りにしてくれ
！！」

カービィ「へっ？」

驚くカービー。

グーイ&p;ワドルディ「……………」

キョトンの2人。

フラッフ「この世界を元通りに出来るのは、僕ら『選ばれし者』だ
けなんだ!!」

第3話へ続く!!

第3話 「それぞれの宿命」 (前書き)

昨日は更新せずに、すいませんでした。
もし、毎日ご覧になっている方がおられるなら、
お礼と共に、お詫び申し上げます。

第3話 「それぞれの宿命」

フラッフ「この世界を元通りに出来るだけの僕ら『選ばれし者』だけなんだ!」

カービィ「え… 選ばれし者? 僕が…?」

フラッフ「そうなんだ!」

ワドルディ「何で、カービィさんが『選ばれし者』って分かるツス?」

フラッフ「僕を最初助けてくれたとき、カービィは車に変身したよね?」

3人の脳内にあの時の光景が浮かぶ。

カービィ「変身した。勝手に」

フラッフ「あの時みたいにな、毛糸の体を変化させて別の物に変身出来るのは、特別な遺伝子を受け継いでいる者だけなんだ」

カービィ「それが『選ばれし者』って事?」

フラッフ「うん」

フラッフが深く頷く。

ワドルディ「どうして、そう分かるツス?」

フラッフ「現に、この国の王子の僕は出来る」

フラッフ「カービィのご先祖はどんな人だったか分かる?」

カービィ「僕のご先祖…」

カービィが考え込む。

ワドルデイ「ティンクル・ポポじゃないスカ！」

カービィ「あっ そうだった！」

ワドルデイがツッコむ用に言った。その瞬間、フラッフが目を丸くして驚いた。

フラッフ「ティンクル・ポポ!? あの銀河を救った!!!?」

カービィ「YES。」

フラッフ「これはビックリ…全然分からなかったよ…」

ワドルデイ「無理もないツス。あんな食いしん坊なんスから」

カービィのお皿を見て言うワドルデイ。

グーイ「あー」

ずっと黙っていたグーイが口を開く。

カービィ「どったの？」

フラッフ「？」

グーイ「僕も一応、ダークマター族の遺伝子を…」

フラッフ「ダークマター族!？」

カービィ「ああ。このおはぎさんは、ダークマター族の中で善意を持って誕生した奴なんだ。だから族から追放されて、僕達の世界に居るの」

考えるフラッフ。

フラッフ「うーん… 2人にはやってもらわないと分からない…」
みんな、僕について来て」

席を立つフラッフ。

なぜかつまらなそうなワドルディ。

ワドルディ（これもスカの宿命ッス）

カービィ「待って！ これ食べちゃうから！」

グーイ「そんな急いで食べたら……」

カービィ「！ ゴフッ！ ゲホゲホ！」

カービィはむせた。

グーイ「ほら言わんこっちゃない」

（フラッフのお城（庭））

カービィ「ここは？」

フラッフ「ぼくのお城の庭」

フラッフ以外の3人は辺りを見渡す。

グーイ「……なぜにこんな仕掛け多いの？」

フラッフ「本当は泥棒対策だったけど、この国が平和になって使い道がなくなったんだ」

カービィ「で、トレーニング場みたいに？」

フラッフ「そう じゃあここで2人は少し試してみて」

カービィ「よしっ レッツゴー！」

グーイ「あのキラキラ光ってるのは何？」

フラッフ「あれはビーズだよ この国の通貨」

ピョンッ！

カービィ「頂きい！」

カービィがビーズに飛びついた。

ワドルディ「お金も好きッスか？」

カービィ「それは言わない！ よい子に与える影響が！」

グーイ（自分で飛びついというて…）

カービィ「むっ 敵だ！」

フラッフ「丁度いいや カービィ、ボールを持つふりして、敵目掛けて投げるようにしてみて」

カービィ「こうっ？」

カービィが右手を出した瞬間、カービィの右手から毛糸が伸び、敵に巻き付いて、ほどいてしまった。

カービィ「わっ！？」

グーイ「おおっ 僕もっ！」

グーイは舌が伸び、敵をほどいた。

フラッフ「2人とも上手！ やっぱりできるんだね」

次はブロックが2つ。

フラッフ「これもほどけるよ！」

カービィ「えいっ！」

グーイ「れろっ！」

カービィの方のブロックはほどけた。

しかし、グーイのブロックはほどけない。

グーイ「ぬぬっ？」

フラッフ「あっ その黄色いブロックは敵を巻き取って、それをぶつけて壊すんだ」

グーイ「よしっ れろんっ！」

グーイは近くの敵を巻き取り毛糸玉にし、それを投げた。

フラッフ「おおっ 上手いね！」

そしてしばらくビーズを取りながら進んだ。

フラッフ「あっ あの宝箱マークのワッペンを剥がしてみて！」

カービィ「よっ！」

カービィはもう慣れたようだ。

グーイ「何これ？ 家具？」

フラッフ「そう 君たちの部屋に飾れるよ！」

「シャンデリアをゲット」

カービィ「うわっ 池っ？」

3人の前には池が広がっていた。

フラッフ「さあ入って入って！」

フラッフは2人の背中を押す。

カービィ「ちょっ！ 押す…」

ドボーン！

カービィ「何押し…て…？」

グーイ「わわわっ？」

2人の体が潜水艦のように変化した。

フラッフ「水に入れば勝手に変わるよ！」

フラッフも池に入る。

カービィ「あれ？ ワドルディは？」

グーイ「？ さっきまで居たのに…？」

フラッフ「おい こっちこっちい」

フラッフはもう先にいる。

カービィ& amp; グーイ「あっ 待ってー」

池から上がった3人。

カービィ「あっ 宝物！」

グーイ「でも高くても届かないよ?」

フラッフ「それなら、あのボタンに毛糸を引っ掛けて、自分を振り子みたいにして上がって!」

壁に縫ってあるボタンを指差す。

カービィ「なるほど、せいっ!」

グーイ「れろりんっ!」

パシッ

ブーンブーン

スタッ

カービィ「よしっ よっ」

宝物マークを剥がす。

「おうさまのいすをゲット」

グーイ「偉そおー」

そこでカービィが何かに気付く。

カービィ「何あの 巨大ルーレット!?!」

フラッフも上がって来た。

フラッフ「あれがゴール。真ん中のベルに掴まったらおしまい。掴まったときに、針が差している星の数だけ、ビーズが貰えるよ」
カービィ「了解! せいっ!」

パシッ！

カランカランカラン

針は星2つを差している。

グーイ「200ビーズゲット！！」

カービィ「あー 疲れたっ」

フラッフ「2人共お疲れ様 部屋に戻ろう」

第4話に続く！！

第4話 「手掛かり」

疲労の色が見えるカービィ達。

カービィ「慣れない動きは疲れるよお…」

グーイ「僕も疲れたー…」

誰が聞く訳でもなく、そう言いながらマンションに戻る。

ガチャッ

カービィ「ただいまあ」

ワドルディ「あつ、お帰りッス！」

部屋の中にはベットに寝そべっているワドルディがいた。

カービィ「あんさん、帰ってたの…?」

ワドルディ「泳ぐの苦手ッス」

どうやらワドルディは、池の手前で部屋に逃げて来たらしい。

ワドルディ「心配したッス？」

カービィ「いや、別に」

素っ気なく言うカービィ。

グーイ「それよりどうしたの? このベット」

ワドルディ「ついさっき、ルーム・ウールさんが持ってきてくれた

ッス」

カービィ「新居祝い？」

ワドルディ「ッス」

返事代わりにスを使ったワドルディ。

コンコン

ガチャッ

フラッフ「みんな、ちょっと聞いて！」

ボタン

部屋に入って来たフラッフ。

グーイ「どうかしたの？」

フラッフ「朝、世界はバラバラにされたって言ったよね！？」

カービィ「それで？（落ち着け…）」

フラッフ「その発言撤回！ 実は隣の国、グラスランドとはまだ繋がっていたんだ！」

カービィ「ちょっと落ち着いて。」

グーイ「何でまだ繋がっているの？」

カービィ「ただのミスじゃない？ あの魔法使い不器用そうだし」

フラッフ「まあ理由はどうあれ、繋がっているんだから行ってみようよ！」

ワドルディ「行くんスか？」

フラッフ「行けば何か手掛かりが掴めるかもしれない！」

グーイ「確かに！ 行ってみましょうよ！」

グーイも興奮気味。

カービィ「明日ね、疲れたもん」

ベットに寝転ぶカービィ。

グーイ「カービィさあん！」

フラッフ「疲れたなら休んでいいよ。まだ体の感覚に慣れていないだろうし」

カービィ「お許し頂き♪ お休み…」

カービィ、就寝。

グーイ「大丈夫ですか？」

フラッフ「大丈夫。時間が限られているわけじゃないし」

フラッフ「僕もお城に戻るね。お休み♪」

ワドルディ「お休みッス」

ワドルディがベットに横になろうとした時、

ピョン

バフッ

ワドルディ「おおっ!？」

ワドルディが横になる前に、グーイがベットに飛び乗ってきた。

グーイ「早い者勝ち」

ドテッ

ワドルデイはベットから落ちた。

ワドルデイ「痛いッス〜 僕も眠いッス〜」
グーイ「そこにソファがあるでしょ」

グーイは備え付けのソファを指（舌）指す。

グーイ「お休み…」

グーイ、就寝。

ワドルデイ「これもスカの宿命ッス…」

ワドルデイはこのセリフが気に入ったようだ。

ワドルデイ「お休みッス…」

ワドルデイ、就寝。

グラスランドは繋がっていると知ったカービー達。

第5話に続く！！

第4話 「手掛かり」 (後書き)

学生業により今週からテスト期間に入ります。
なので本日より、更新を一定期間停止します。
誠に勝手ですが、ご理解ご承諾の方、宜しくお願い致します。

第5話 「緑の国グラスランド」 (前書き)

暗黒物質です。

テスト期間はもう終わりましたので、本日より更新を再開致します。
長期間更新をせず誠に申し訳ありませんでした。

第5話 「緑の国グラスランド」

くフラッフのお城く

ー食堂ー

ワイワイ ガヤガヤ

朝から賑わっている食堂にいつもの4人の姿が。

カービィ「で、今日はそのグラスランドに行くの？」

フラッフ「そうだよ」

ワドルディ「なんか、いよいよって感じっスね」

朝食を食べ終えた4人。

くキルトの町く

フラッフ「じゃあルーム・ウール、行ってくるよ」

ルーム・ウール「お気を付けて！ カービィ殿、王子を頼みましたぞ！」

カービィ「任せといてっ！」

自分の胸をポンと叩くカービィ。

グーイ「それで、どうやって行くの？」

カービィ「僕の移動手段と言ったらコレでしょ！」

カービィのどこからか携帯電話を取り出し、空に向けて喋り始めた。

フラッフ・グーイ・ワドルディ「？」

すると空に一筋の光が

カービィ「こっちこっち！」

ドーン！

カービィ「ぎゃっ！」

空から大きな星が地面に落ちて来た。
それと同時にカービィは吹き飛ばされた。

グーイ「ワープスターだ！」

ワドルディ「そう言えばッスね」

カービィがムクリと起き上がる。

カービィ「痛たたた： さっ さあ乗って！」

フラッフ「大きな星だねえ どうやって乗るの？」

グーイ「こうやって！」

3人はワープスターにしがみつく。

カービィ「大丈夫！ 落ちはしないから」

フラッフ「ふーん じゃあ遠慮なく」

フラッフもワープスターに乗った。

フラッフ「じゃあルーム・ウール、今度こそ行ってくる！」

ルーム・ウール「お気を付けて!!」

カービィ「出発!!」

キラリリン シューーーン

くグラスランドく

シューーーン

カービィ「到着くく」

グーイ「ふう」

ワドルディ「よっ」

カービィ「バイバーイ!」

ワープスターは空へ戻って行った。

グーイ「ここがグラスランド…」

フラッフ「緑が多い国でしょ」

カービィ「うん すごい気持ちが良いや」

ワドルディ「平和ツスね」

しばらく辺りを歩き回ったカービィ達。
すると、

カービィ「…何? この意味有りげな扉?」
グーイ「扉というか…」

そこには明らかに周りと違う、

毛糸で縁取られた、別の空間の入り口のような扉が。

フラッフ「うーん とりあえず入ってみようよ？」

カービー「…よし！ 行ってみよう！」

第6話に続く！！

第6話 「ダチヨウ倶楽部」 (前書き)

すいませんでした。

理由は聞かないでください

これから頑張って更新していくのでごめんなさい。
本当にすいませんでした。

第6話 「ダチヨウ倶楽部」

カービィ「よし、行ってみよう！」

そう言いながらワドルディの背中を押すカービィ。

ワドルディ「ちょちょちょ！ 押さないでッス！」

カービィ「ワドルディ先行ってよ〜」

さらに押すカービィ。

ワドルディ「カービィさん先行ってくださいよ！」

カービィ「やだやだ怖いもん〜」

ワドルディ「フ：フラッフさんなら行けるッスよね！？」

フラッフ「うーん 僕だってこんなの見たことないし…」

一連の様子を見てたグーイが急にこう言った。

グーイ「もう！ このままじゃ埒があかない！ 僕が先行きます！」

とたんにカービィの顔がすこし明るくなる。

カービィ「あ行ってくれるのグーイ！」

ワドルディ「（鬼だ…）」

グーイ「でも自分のタイミグで行きますから絶対に押さないでくださいよ！？」

グーイは深呼吸した。

グーイ「絶対に押さ…」

ゲシッ

グーイ「!!カーあああああああああ………」

グーイは何者かに蹴られ、落ちた。

ワドルディ「!!カービィさん!!」

カービィ「おっ？」

ワドルディ「なに押してんスカ!!」

カービィ「いや…ダチヨウ倶楽部でもしたいのかなって」

ワドルディ「したいわけじゃないスカ…」

カービィ「はいドローン!!」

ワドルディ「!!ッスーーーーー!!」

不意を突かれて両肩を押されたワドルディはあっけなく落ちた。

フラッフ「あははは!」

笑い出すフラッフ。

フラッフ「あー面白かった。こういうのもいいね」

王子であるフラッフはこのようなノリは今まで味わってこなかった。

フラッフ「さあ 行こう!」

カービィ「いってらっしゃーい」

フラッフ「カービィもだよ!」

第7話 「ふんすいのにわ」

フラッフ「確かここは「ふんすいのにわ」だ！」
グーイ・ワドルディ「ふんすいのにわ？」

二人はフラッフの元に行き、聞いた。

カービィ「ハア…ハア…」

カービィも池から上がり、三人の元へ。

カービィ「あービックリした」
フラッフ「みんな、ここはふんすいのにわだよ！」

そう言われても当然三人はピンとこない。

ワドルディ「知ってるんスか？」
フラッフ「昔よく遊びに来てた。でもあんな扉をくぐって来た覚えは…」

グーイ「あの魔法使いが何かしたんだね」

フラッフ「みんな先に進もう」

カービィ「先？」

フラッフ「うん」

ワドルディ「先ってどこッスか？」

フラッフ「僕のお城の庭で色々練習したでしょ？」

カービィ「ああ、あのワドルディが途中で逃げたところね」

フラッフ「あの泥棒対策の仕掛けはこのふんすいのにわから真似たものなんだ」

グーイ「へー」

フラッフ「だからあのときと同じようにして先に進めば何かまた新しい手掛かりが掴めるんじゃないかな？」

グーイ「そうだね、進まないよりは進んでみようよ。何か分かるかも」

カービィ「よし、じゃあ行こうか」

ワドルディ「珍しくやる気ッスね」

三人は歩きだした。

カービィ「あっ ビーズビーズ」

カービィは落ちているビーズを拾いながら歩く。

ワドルディ「げっ！」

グーイ「わぁ」

二人は驚いた。

目の前には池が広がっていた。

ワドルディ「こんなの渡れるんスか」

池には橋が架かるようにして向こう岸まで一本の毛糸が架かっていた。

カービィ「はい、せーれーっ！」

ワドルディを先頭にして、カービィ、グーイ、フラッフの順で並んだ。

ワドルディ「なんで僕先頭なんスか！ 押さないでくださいよ！ 絶

対！」

カービー「分かってる、押さないから」

四人は渡る。

そしてのこり3分の1程度となったところ。

カービー「もう 歩くの遅くない？」

ワドルディ「しょうがないッス、それでも早い方ッス、落ちてないだけ奇跡ッス」

カービー「…」

ドンッ

ワドルディ「！ ちよっ わわわわわわわわ！！！！！」

誰かが背中を押したせいでワドルディはバランスを崩し、今にも落ちそう。

だが

ワドルディ「おっちる！」

ピョン ピョン スタッ

ワドルディは落ちずに、バランスを崩した反動を利用して向こう岸に見事に着地した。

ワドルディ「おおっ 助かったッスー！」

カービー「(ちえっ…)」

三人も岸に着いた。

カービィ「ん？ なにこのワッペン」

カービィは岸にあった木に付いてあるワッペンを剥がした。
するとワッペンが貼ってあったところに大きな穴が空いていた。

カービィ「わお ねーここ入れそうじゃない？」

フラッフ「ホントだ」

カービィ「僕先行くよー」

カービィは入っていった。

フラッフ「僕も」

グーイ「僕も」

ワドルディ「置いてかないでッス」

ー木の中ー

フラッフ「意外と広いね」

木の中は広く、高さもなかなかある。

グーイ「上の方、なんか光ってるけどあそこから外出れない？」

カービィ「あー確かに光ってるね」

四人は上を見上げる。

ワドルディ「どうにかしてあそこ行けないッスカね」

四人は辺りを見回す。

四人「！　これは？」

四人の言葉が見事に重なる。

そこにあつたのは足場。

しかも上の出口に向かって壁に沿うようにして幾つもの足場が続いている。

カービィ「レッツゴー！」

四人はジャンプで足場を乗り継ぎながら登り始めた。

グーイ「っていうか長い　結構登ったけどまだ半分だよ」

ワドルディ「それに高いッス」

ワドルディは何か気配を察知し、後ろを向いた。

カービィ「あ」

そこには明らかに押そうとしているカービィがいた。

ワドルディ「カービィさん！！　こんなところから落ちたらシャレに
なんないッス！！！」

そして登りきった。

ワドルディ「やっとついたッス…」

カービィ「疲れたあー」

グーイ「長かった…」

フラッフ「外に出てみようよ」

四人は外に出た。
そこには宝箱があった。

カービィ「宝箱!!」

グーイ「おお」

ワドルディ「洞窟大作戦のときみたいッス」

カービィ「開けゴマ!!」

グーイ「普通に言いなさいよ」

カービィは宝箱を開けた。

グーイ「中身は？」

カービィ「ソファ…？」

フラッフ「はなのソファ」だね」

「はなのソファをゲット」

カービィ「はいっ」

ドスッ

ワドルディ「ッス!!!」

カービィは休憩していたワドルディに無理矢理持たせた。

ワドルディ「重いッス重いッス！」

カービィ「ワドルディ荷物持ちね 落とさないでよ？ 貴重な家具
なんだから」

ワドルディ「重いッス重いッス！ ああっ待ってッス!!」

先に行っている三人。ワドルディはダッシュで追いかけた。

ヤリワドルディ「カービィ、覚悟！」

カービィ「わっ！」

後ろを向くとヤリを構えたワドルディがいた。

カービィ「どったのワドルディ？ とりあえず落ち着いて」

ワドルディ「僕ここッス…」

横を向くと重そうにソファを持っているワドルディがいた。

カービィ「あれ？ えーとじゃああなた敵…」

ヤリワドルディ「カービィ、覚悟！」

ヤリワドルディが突っ込んできた。

カービィ「危なあ！！」

カービィは間一髪でよけた。

フラッフ「カービィ！ そのヤリを毛糸で巻き取ってドリル毛糸玉を作って！」

カービィ「！ よし分かった！」

ヤリワドルディ「おりゃあああ！！」

カービィ「よっ それ！」

再び突進してきたヤリワドルディを避けつつヤリを巻き取った。

ヤリワドルディ「うわ！」

ドテッ

その衝撃でヤリワドルディは転けた。

カービィ「ヤリワドルディ、覚悟！」

カービィはヤリワドルディに向かってドリル毛糸玉を投げた。

ヤリワドルディ「！」

次の瞬間ヤリワドルディはただの毛糸となり、消えた。

フラッフ「今のがドリル毛糸玉。物を貫通するんだ」

カービィ「OK 覚えた」

グーイ「なんかさっきのワドルディ変じゃなかった？」

カービィ「そう？」

グーイ「なんか、こう、雰囲気がプンプランドのワドルディと違う気が…」

カービィ「あ、宝箱！！」

グーイ「（聞きなさいよ…）」

ヤリワドルディがいたところに宝箱が落ちている。

カービィ「オープン！」

「ふんすいをゲット」

グーイ「おおふんすい」

カービィ「水はまだ無いけどね はいよろしく」
ワドルディ「ッス!!!!!!」

フラッフ「カービィ! これ!」
カービィ「?」

フラッフが指さす先には見た目が少し不思議なワッペンがあった。

カービィ「なにこのワッペン?」

フラッフ「これはメタモルワッペンで言うんだ 剥がしてみて」
カービィ「よっ」

カービィがメタモルワッペンをはがした瞬間。

カービィ「!! わわわわわわわ!!!!!!」

カービィの体が巨大なロボットに変身した。

ビッグロボカービィ「何これえええええええ!!!!!!??」

フラッフ「これがメタモル変身。他にも色々あるよ」

グーイ「大きいね」

ワドルディ「足がキャタピラッス…」

フラッフ「カービィ、乗せてね」

フラッフはそう言うと、カービィの頭部分にあるコックピットにグーイとワドルディをつれて乗り込んだ。

グーイ「なんかボタンある」

グーイはボタンを押した。
すると、

ビッグロボカービー「アガッ！」

パシユウウウウ

ドガアアアアアン！！！！！

ビッグロボカービーの口からミサイルが飛んだ。

ミサイルは木に当たり、木は黒コゲになった。

グーイ「すごー！」

ビッグロボカービー「コックピットで何したああああー！」

グーイ「なんかボタン押した」

フラッフ「ん？」

フラッフは目を凝らして遠くを見た。

ブロントバート群「カービー、覚悟おー！！」

遠くからミサイルを持ったブロントバートが大量に來ている。

一同「わああああああー！！！！！！」

フラッフ「カービー！　こっちでミサイル撃つからキャタピラ動かせて！」

ビッグロボカービー「分かった！」

ビッグロボカービーが進んだ。

ブロントバート群も突っ込んでくる。カービー達との距離が段々狭くなっていく。

グーイ「フラッフさん、ミサイル！」

フラッフ「まだ、十分引き付けてから…」

距離が縮む。

ワドルディ「フラッフさん…？」

フラッフ「まだまだ…」

距離が縮む。

グーイ・ワドルディ「フラッフさん…！」

フラッフ「発射…！」

パシユウ

ドガアアアアアアアン…！！！！！！

ビッグロボカービー「ナイスフラッフ！ みんなやつつけた！」

フラッフ「あー怖かった」

ワドルディ「凄いッス！」

グーイ「さすが王子！」

四人が歓喜に沸く中、メタモルワツペンの効果が切れた。

パツ！

四人は地面に落ちた。

カービー「もうおしまい？ 顎痛いんだけど」

フラッフ「メタモルヘンシンは強いからね 僕も変身できるしグー

イもきつと出来るよ」

グーイ「顎痛くなるのはやだな」

ワドルディ「家具重すぎッス…」

カービィ「ん？ あれゴールのベルじゃない？」

カービィの視線の先にはフラッフの城にもあったあのベルが。

カービィ「よっ」

パシッ

カラーン

ゴールの針は300を指している。

カービィ「300ビーズゲット！」

グーイ「とりあえずゴール！」

すると突然、ゴールのベルが変化し、ここに来るときに入ったあの扉になった。

カービィ「おっ　なんかベル変化したよ」

ワドルディ「あの扉ッス」

フラッフ「入ればガラスランドに戻れるかもね」

カービィ「じゃお先に」

グーイ「(こういうときばっかズルい)」

カービィに続いて三人も入った。

ーグラスランドー

カービィ「ふー戻ってきた」

第8話に続く！！

第8話 「心も綺麗に おはなばたけ」

ーグラスランドー

カービィ「あー疲れた ちょっと休憩」

カービィはその場に寝転がる。

ワドルディ「いい加減腕が限界ッス！ カービィさんなんとかしてくださいッス！」

カービィ「もううるさいなあ ワープスター呼んであげるからちょっと待って」

カービィが携帯電話を取り出し、
通話を終えたその時。

ガサガサ ガサガサッ

フラッフ「？ 何だろう」

近くの2つの茂みが突然動きだし、左右に分かれた。

グーイ「あっ」

分かれた所から扉が出現した。

カービィ「…ステージクリア、で次のステージ登場？」
フラッフ「あの魔法使いこんな仕掛けを…」

グーイ「1つ1つクリアして行くしかないみたいだね」

カービィ「またこういうパターンか…」

カービィにとってはもう慣れっこだろうがさすがに面倒らしい。

キラリッ

カービィ「あっワープスター」

ヒュウウウウウ

ドーーーーーン!!

ワープスターが思い切り地面に激突。

グーイ「…その到着の仕方何とかならないの？」

カービィ「元気がいいのは良いこと」

カービィ「ほら ワープスター貸してあげるから部屋に置いてきて」

ワドルディ「1人でツスカ？」

フラッフ「ルーム・ウールも手伝ってくれると思うから」

ワドルディ「じゃじゃあ行って来るツス」

カービィ「僕ら先進んでるからねー！」

シューーーーーン

キラキラリン

グーイ「って言うかあれ家具落ちないの？」

カービィ「大丈夫! …多分」

フラッフ「よし じゃあ進もう」

ーおはなばたけー

ヒュウウウウウ

スタツ

カービィ「おおっ！　綺麗！」

辺り一面はお花畑になっている。

グーイ「綺麗」

フラッフ「すごい」

カービィ「いやぁ心が洗われますなあ」

グーイ「口調が老けてるよ」

ーキルトの町ー

キラキラリン

シューーーー

ワドルディ「家具が落ちそうで腕ちぎれるかと思ったツス」

ルーム・ウール「これはワドルディ様。お帰りなさいませ」

ワドルディ「どうもツス　えーと色々家具拾ったんで部屋に置きた
いんすけど」

ルーム・ウール「模様替えですね。かしこまりました」

そう言うとワドルデイが絶叫しながら持った家具を片手でひょいと抱え上げた。

ワドルデイ「ツス!!!」

ルーム・ウール「どうぞどちらへ」

表情を何も変えずに、眉毛1つ動かさないうで部屋へ歩を進めた。

101号室

ルーム・ウール「どこに置きましょう？」

ワドルデイ「ツス。そこら辺に適当に置いて大丈夫ツス その内模様替えしますから」

ルーム・ウール「かしこまりました」

ルーム・ウールは壁の方に家具を置く。

ワドルデイは部屋を出てワープスターに乗る。

ワドルデイ「(はぁ また荷物持ちスかなあ カービィさんの口の中にでも入れればいいのに...)」

ルーム・ウール「お気をつけて！」

シューシュー

ワドルデイ「こうしている間にもまた新しい家具を…」

キラキラリン

ーおはなばたけー

カービィ「また新しい家具ゲット！」

フラッフ「ひまわりのとけい」だね」

「ひまわりのとけいをゲット」

グーイ「ワドルディ遅いね」

カービィ「あの茶色： まあそろつと来るでしょ」

すると遠くから見覚えのある茶色が…。

フラッフ「あつ あれじゃない？」

ヨロヨロ ボテッ

茶色が倒れた。

茶色「つつ疲れすぎたッス…」

グーイ「大丈夫？」

カービィ「茶色。あんたスタミナがないのよスタミナ。スタミナつけたきゃ砂肝食べなさい。んで砂肝食べたら鉄分のサプリメントを…」

グーイ「情報が老けてるよ」

茶色「茶色じゃないッス： スタミナとかの問題じゃないッス…」

ワドルディ「あんな高い崖登れないッス…」

道中には中々高い崖があった。

カービィとフラッフは毛糸、グーイは舌を使い、

近くにあったボタンに引っかけ、振り子の要領で勢いをつけて登った。

だがワドルディはそんなことできない。

カービィ「あー あったつけ？」

ワドルディ「僕は毛糸使えないスから地道に登って…」

ワドルディは立ち上がった。

カービィ「で早速だけどここの家具よろしく☆」

ワドルディ「…」

ワドルディ「カービィさんの口の中入れといてくださいよ」

カービィ「へ？」

ワドルディは時計を持ってカービィに飛びかかった。

カービィ「やだよそんなの！」

ワドルディ「運ぶの重いッスー!!」

ジタバタ ジタバタ

その様子を座って観ている2人。

フラッフ「どっち勝つと思う？」

グーイ「…『あ おいしい!』に100ビーズ」

ワドルディ「以外とおいしいかもしれないッスよ!?!」

カービィ「ならワドルディ食べていいよ!?!」

そして決着がついた。

一瞬の隙を突いてワドルディの手がカービィの口を捕らえた。

カービィ「フゴッ！」

ゴクン

ワドルディ「ふう… どうツスカ？」

カービィ「…おいしい…」

フラッフ「ええっ！！？」

グーイ「ね」

カービィ「あー心配しないで 後でまた出せるから」

カービィ「それよりも以外とおいしい！ 早く次探そう！」

カービィは行ってしまった。

3人も後を追った。

カービィ「おっ」

池だ。4人は歩みを止める。

ワドルディ「水嫌いッスー！」

カービィ「しょうがないなあ 僕の水中メガネ貸してあげるから」

そう言った次の瞬間、カービィの手には水中メガネが握られていた。

フラッフ「どこから出したの！？」

カービィ「いつも持ち歩いてる冒険7つ道具」

グーイ「7つもないでしょ」

カービィ「はい これなら水鉄砲で攻撃も出来るから」

ワドルディ「ありがとうッス」
フラッフ「じゃ入るよ」

ー水中ー

ワドルディ「凄いッスー 快適ッスー」

ワドルディは気に入ったようだ。

カービィ「僕も普段から潜水艦がいいな」
グーイ「確かにこっちの方が楽かも」
フラッフ「あ あれ宝箱じゃない？」

フラッフは空中の足場を見て言う。

カービィ「僕取って来るー！」

カービィは水面へジャンプし、素早く空中のボタンに毛糸を伸ばした。

パシッ ブーーン ブーーン スタッ

カービィ「振り子ぐらい簡単に…」

恐らくワドルディに向けて言いながら宝箱を開けた。

カービィ「いただきまーす！」

ワドルディ「あ 戻って来たッス」

フラッフ「どんな家具だった？」

カービィ「んー しょっぱい」

グーイ「違うって」

4人は岸に着いた。

そして目にしたものは、

ワドルディ「でたッス！ この崖ッス」

あの高い崖だった。

カービィ「だからこうやって振り子にしてね」

カービィはボタンに掴まる。

ワドルディ「スカだからできないんッス！」

グーイ「カービィが連れてってよ」

カービィ「うえ？」

ワドルディ「それがいいッス」

ワドルディはカービィの足に掴まる。

カービィ「ちよっ 重いつて！」

ワドルディ「お願いしまッスよ」

カービィ「… じゃ1、2の、3で飛ぶよ」

ワドルディ「分かったッス」

家具がおいしいことが分かったキツカケだからだろうか、いつもよりカービィがワドルディに対して優しい。

カービィ「せーの 1、2の、さーーん!!」

飛んだ。

カービィ「! 危なっ…!!」

2人は見事に空中でバランスを崩し、地面に頭から滑り込んだ。

ワドルディ「ツス!」

ゴリゴリゴリゴリゴリゴリゴリゴリゴリゴリゴリ

グーイ「あらら」

フラッフ「大丈夫?」

2人も登ってきた。

カービィ「痛ああああ!!!!!!」

ワドルディ「ツスツスツス!!!!!!」

2人の額は真っ赤だ。

カービィ「だから無理だっていったのにー!!」

グーイ「言っていないよ」

フラッフ「あ カービィ! メタモルワッペン!」

カービィ「これじゃ若ハゲに……… ん?」

グーイ「若ハゲどころかスキンヘッドでしょ」

メタモルワッペンがあった。

カービィ「よし剥がすよ それっ」

剥がした瞬間、カービィ、フラッフ、グーイはUFOに変身した。

UFOカービィ「これは：UFO？」

UFOグーイ「僕まで変身できた」

UFOカービィ「どうやって攻撃するの？」

UFOフラッフ「キャプチャビームっていうビームで敵かブロックを3つ吸い込むとカミナリで攻撃できるよ」

UFOカービィ「なるほどキャプチャビーム： それっ」

UFOカービィはワドルディに向かってキャプチャビームを出した。

ワドルディ「！！ もう吸い込まれるのは嫌ッスー！」

UFOカービィ「冗談ー☆ じゃあグーイ、ワドルディ乗っけてあげて」

UFOグーイ「ええっ 僕が？」

UFOカービィ「さっきグーイのせいでこうなっただからね」

UFOカービィは額を見せながら言う。

UFOグーイ「まあいいよ 置いていく訳にも行かないし」

ワドルディ「ありがとッスー」

4人はしばらくビーズを集めながら進んだ。

順調に進んでいたが巨大な蜂の巣が道を塞いでいる。

UFOカービィ「なにこれ？ 邪魔」

UFOフラッフ「その蜂を吸い込んでカミナリで攻撃すれば壊れるんじゃないかな」

UFOカービィ「OK! 蜂さんごめんね!」

カービィは蜂を吸い込んだ。

UFOカービィ「わあ 体が光った!」

UFOフラッフ「充電完了!」

UFOカービィ「よし 放電!」

バリバリバリバリ

チュイーン

ズバアアアアアン!!!!

UFOカービィ「ステイブン・スピルバーグ監督もビツクリの大迫力!」

UFOグーイ「壊れたかな?」

煙が晴れていく。

しかし目に見えたのは無傷の蜂の巣だった。

UFOカービィ「あれっ? なんで?」

すると突然、今まで黄色だった蜂達が真っ赤になり凄い速さで襲ってきた。

UFOカービィ「わっわっわっ どうなってんのお!」

UFOグーイ「怒らせちゃったのかなあ!」?

ワドルディ「怖いッス!」

UFOフラッフ「あっぶっなっ!」

そこに蜂の巣は無かった。

UFOフラッフ「やったあ！」

ワドルディ「やつつけたッス！」

UFOカービィ「原辰徳監督もビックリの大迫力!!!」

UFOグーイ「それ巨人の監督」

メタモルワツペンの効果が切れた。

パッ

カービィ「あー面白かった UFOいいね。顎痛くなんないし」
ワドルディ「あ ゴールベルッス」

お馴染みのゴールが。

カービィ「たあっ」

針は500ビーズを指している。

カービィ「大量！ 500ビーズゲット！」

グーイ「ゴール!!!」

第9話に続く!!

第9話 「スリル満点川下り」

ーグラスランドー

カービィ「はい ただいま」

グーイ「はい ただいま」

カービィ「真似しないでっ」

ワドルディ「はい ただいま」

カービィ「だから…」

フラッフ「はい ただいま」

カービィ「フラッフまで!!」

モクモクモク

グーイ「？」

さっきまで快晴だったが突然、空は大きな雨雲に覆われ、雨が降ってきた。

ザーー ザーー

グーイ「雨だ」

ワドルディ「突然ツスね」

段々と雨足が強くなる。

ザーーザーー ザーーザーー！

フラッフ「ちょっと強くない？」

更に強くなる。

ジャーーーーーー！ ジャーーーーー！……！！

カービィ「ちよっ… 強すぎ…」

カービィの声すらまともに聞き取れない。
そして更に雨は強くなる。

ドジャーーーーーー！！ ドジャーーーーーー！！……！！

ワドルディ「痛いッス！ 強すぎッス！！」

カービィ「痛い！ 雨痛い！」

フラッフ「いててて！ みんなどこ！？」

グーイ「なんにも見えない…っ痛！！」

雨が強すぎるため視界がかなり悪くなる。
まだ雨は降り続いている。

カービィ「ひiiiiiiii！！！！！！」

ワドルディ「神の裁きッス！！ ノアの大洪水ッス！！」

ジャーーーーーー！！ ジャーーーーー！

ジャーーーーーー！ ジャーーーーー

カービィ「んれ？」

ザーー ザー

雨は徐々に弱くなってきている。

ポツ ポツ

そして完全に止んだ。

カービィ「…何だったの今の…」

ワドルディ「通り雨にも程があるッス！」

モクモク パアーーーーー！！

雨雲が消え、空が一気に晴れた。

グーイ「…。この国はこんなに天気の変り変わり激しいの？」

フラッフ「…僕もビックリ」

カービィ「あら 虹」

豪雨の後、急に晴れたため空に大きな虹が出来ている。

ワドルディ「きれいッス 神からのご褒美ッス」

カービィ「何か宗教信仰してる？」

グーイ「ホントだ きれいー…？ ん？」

グーイは地面からアーチ状にできている虹のふもとに扉があるのを見つけた。

フラッフ・グーイ「カービィ、あれ扉じゃない？」

フラッフも同時に言った。どうやらフラッフも見つけていたらしい。

カービィ「何2人揃って。扉？ ああ次のステージね」

4人は虹のふもとへ行き、扉に入った。

ーにじのたきー

ドドドドドドドドドドドド

カービィ「ドドドドドドドドドドドド」

ワドルディ「なに復唱してんスカ！ これ滝ッスよ！」

カービィ「見れば分かるドド」

ワドルディ「口癖になってるッス！」

目の前には大きな滝がある。

地面は全て浅い川になっていて、先に進むなら流れに逆らって歩くことになる。

グーイ「浅いけどこの川結構流れ速いよ？」

ワドルディ「足だけ常に冷たいッス」

フラッフ「流されないように気を付けて進まないのだね」

4人は歩き始めた。

が、川の流れが速くなかなか前に進まない。

カービィ「…ぜんぜん進まないドド」

ワドルディ「その口癖止めて欲しいッス！ 僕の「ッス」とかぶっ

てるッス！」

カービィ「いや 無意識に出ちゃうドド」

ワドルディ「それじゃ本当に口癖になってきてるッス！！ 今すぐ意識して止めるようにするッス！」

カービィ「分かった止めるド… 分かった止める」

く仕切り直しく

カービィ「全然進まないド… 全然進まない」

グーイ「思ったより流れが速いんだね」

カービィ「！ こういう時は…」

閃いたようにしてカービィが動き出す。

カービィ「これでOK！」

ワドルディ「… だからなんで僕先頭なんスカ！！」

またワドルディを先頭に、カービィ、フラッフ、グーイの順で1列に並んだ。

カービィ「こうして進んだ方が波の抵抗少なくなるでしょ？」

ワドルディ「だからって僕が先頭の理…」

カービィ「はいレッツゴー！！」

4人は電車ごっこの様に体を密着させて進んだ。

フラッフ「かなり歩きやすくなったね」

グーイ「だいぶ楽だよ」

カービィ「作戦成功だね。この調子でGOGO！」

ワドルディ「楽なのは後ろだけッス！！ 先頭は全然楽じゃないッ

ス!!」

それもそうだ。

先頭のワドルデイが水の勢いを全て受け止めているのだから。

カービィ「大丈夫大丈夫 はいGOGOG!」

カービィはワドルデイを無理矢理押して進ませようとする。

ワドルデイ「ツス!　せめて休憩欲しいツス!」

カービィ「休んだら流されちゃうよ?」

ワドルデイ「(これもスカの宿命ツス…)」

ワドルデイは渋々歩き続けた。

わらわら　わらわら

カービィ「…なにこの大量のワドルデイ…?」

やっと川の流れが緩くなったきた頃だった。

ワドルデイが10人、いや20人はいる。

グーイ「多すぎ…」

カービィ「!?!　あれなんかどんどん増えていったくない?!?」

ワドルデイ軍団「(わらわら　わらわら　わらわら)」

ワドルデイ「増えてってるツス!!」

ワドルデイが喋った途端、ワドルデイ軍団が襲いかかって来た。

ワドルディ軍団「わーーーーー！！！！！！」

カービィ「おわあ!!!!!!」

ワドルディ「ツス!!!!」

グーイ「なっ！！！！」

フラッフ「わわわわ！！！！！！」

ト
ト
ト
ト
ト
ト
ト
ト
ト
ト
ト
ト
ト

ワドルデイの大群に4人は飲み込まれた。

ウジャウジャ
ギユウギユウ

ワドルディ「なんなんスかあんたたち！」

ワドルディ軍団の一部「……なかまー」

ワドルディ「……ッス？」

ワドルディ軍団の一部「なかまー」連れてくー」

カービィ「うう 暑苦しいドド…」

ワドルディ達の足音に反応したのか、カービィの口癖が再発した。

「カービィ
何でこんなに増えてるドド!？」

ワドルデイ軍団は50人程にまで増えていた。

フラッフ「カ、カービィ！ あれ！」

カービィ「？」

フラッフが指す先を見ると、そこには1枚のハンカチのような布が空中に浮いていた。

そしてその布がモコモコと膨らみ、布の裏からワドルディが沢山出てきた。

カービィ「あれが原因ドドね！」

カービィは近くのワドルディを数人巻き取って毛糸玉にし、ハンカチに投げつけた。

カービィ「これでも食らえドド！！」

バシィイン！

毛糸玉は命中し、ハンカチはヒラヒラと落ちて消えた。

カービィ「みんな！これで大丈夫だよ！後は1人1人やつつて…」

ワドルディ「たっ助けてッス〜！」

カービィ「ぬ？」

カービィが声のする方を見ると、ワドルディがワドルディ軍団の一部に神輿のようにして担がれ、運ばれていた。

カービィ「世話の焼ける…グーイ！助けてあげて！」
グーイ「今手が放せな…」

グーイも大変そうだ。

カービィ「じゃフラッフ！」

フラッフ「こっちも厳しい…」

フラッフも必死に毛糸玉にしている。

カービィ「…しょうがない、助けに行こう」

カービィ「ほらっ どいて！」

ワドルディ軍団の一部「あうっ！」

カービィは徐々にワドルディに近付いていく。

スッ

カービィ「ん？」

パラソルワドルディ「なかまー 連れてくー じゃまー させないー」

パラソルを持ったワドルディがカービィの前に立ちはだかった。

バシッ バシンッ

カービィ「痛っ！ 痛い！ 武器反則！！」

バシッ バシンッ

カービィ「痛いって！ 怒るよ？」

バシッ

カービィ「ああもう!!」

パシッ

カービィは降り懸かってきたパラソルを掴み、奪い取った。

カービィ「今度はこっちの番!」

カービィはパラソルをバットの様にして大きく降りかぶった。

カービィ「お返しいいいいいい!!!!!!!!!!」

カキイーーーーン!!!!!!

キラーーーーン

パラソル(を持ってた)ワドルディは空の彼方へ消えた。

カービィ「逆転サヨナラ満塁場外ホームラン♪」

ワドルディ「助けてッス!」

カービィ「あ 忘れてた」

カービィはパラソルで他のワドルディを蹴散らし、ワドルディを救出した。

ワドルディ「助かったッス」

カービィ「早く逃げよう!」

ワドルディ軍団「逃がすなー 追いかけるー!」

グーイ「フラッフさん！ 僕たちも逃げよう！」
フラッフ「うん！」

4人は精一杯走った。

川の流れの向きも変わり、走りやすくなったのだが、

カービィ「ダメだ！ ワドルディ軍団速っ！」

差はどんどん縮まっていく。

カービィ「おっ！」

カービィは前方に畳み一畳程の大きさの木の板を見つけた。

カービィ「みんな！ セーのでジャンプね！？」

グーイ「へ！？」

カービィ「あそこに落ちてる木の板に乗るから！」

ワドルディ「何言ってるんスか？」

フラッフ「乗り物にするの？」

カービィ「そういうこと！」

もう板は目の前にある。

カービィ「ほらっ 飛び乗って！！」

4人は板に乗った。

ワドルディ「全然進まないッス！」

しかし川の流れにつられて板は徐々に動いている。

ワドルディ軍団「突撃――！！！！！！！！」

ワドルディ軍団が完全に追いついた。

カービィ「わわわ！　パラソルアタック！　パラソルアタック！」

グーイ「毛糸玉攻撃！」

フラッフ「巻き取りっ！」

板の上で激しい戦いが繰り広げられている。

段々と川が下り坂に差し掛かり、スピードが出てきた。

ワドルディ「速くなって来てるッス」

そして下り坂になりきった瞬間……

ゴオオオオオオオ！！！！！！

4人「うわああああああ！！！！！！！！」

猛スピードで川を下り始め、ワドルディ軍団を振り切った。

ゴオオオオオオ！！！！！！

フラッフ「カービィ、よく思いついたね」

カービィ「僕が一番ビックリ」

グーイ「どうやって降りるのこれ？」

カービィ「……さあ？」

グーイ「「さあ？」って！！」

フラッフ「もう岸そこだよ！？」

ワドルディ「乗り上げるッス！！」

ドッシャアアアアア………!!

カービィ「いやー 詰めが甘かった うん」

ワドルディ「死ぬかと思ったッス！」

グーイ「かなり怖かった!!」

カービィ「いいじゃん 奇跡的に怪我ないんだし」

グーイ「奇跡的にね!!」

フラッフ「無茶するなあ……」

フラッフ「あ ゴールベルだよ」

カービィ「いっつも丁度いい所にあるね」

パシッ

カラーン カラーン

300ビーズを指している。

カービィ「300ビーズゲット!!」

第10話に続く!!

第10話 「謎の4人組」

ーグラスランドー

カービィ「はい ただいま」

フラッフ「スリル満点だったね」

ワドルディ「…なんかこの小説、話の冒頭が毎回ほとんど同じじゃないスか？」

カービィ「しょうがないでしょ。元ネタがゲームなんだから。こういうのは連載していく内に段々馴れていくの」

ワドルディ「そんなもんスカ？」

カービィ「そんなもんスよ」

グーイ「はいストップ。そんな世界観をブチ壊す事言わない」

グウ

ワドルディのお腹の虫が鳴った。

ワドルディ「お腹空いたッス」

カービィ「僕もお腹空いた…」

カービィは手でお腹をさする。

カービィ「!! あ思い出した！」

突然カービィが声を張り上げて言う。

グーイ「何？」

カービィ「さっきの川下りの所、食べ物なかったよね!？」

フラッフ「食べ物？」

グーイ「……宝物、家具のこと？」

カービィ「そうそれ！ 前のステージにもあったんだからないわけ
ないと思うんだけどなあ……」

カービィ「も1回探してくる？」

ワドルディ「嫌ッス。またあの大群に捕まるッス」

ワドルディが即答した。

グーイ「僕も嫌。あんな川下りもうしたくない」

フラッフ「僕もできれば行きたくない」

2人も拒否した。

カービィ「ちえっ……。食べ物……」

さすがにカービィも1人では行きたくないらしい。

ガサッ ガサガサッ

近くの茂みが微かに揺れる。

???? 「フッフ…… 見ろよ、カービィの奴テンパってるぜ」

茂みの裏で数人が話し合っている。

???? 「さすがツチュ団長。こんな世界に来てまでお宝を奪い続けるなんて」

???? 「まあな。一時はどうなるかと思ったが、あいつらの後を追

って行けば何か分かるかもしれないし、お宝も奪える」

「???」「まさに一石二鳥じゃな」

「???」「オイラもお腹空いたモ」

「???」「フフフ… さあ、次のステージはなんだ?」

ヒュウウウウウウ

「???」「ん?」

ゴチイイイン!!

「???」「ぐあああっ!」

バタッ

空から何かが降ってきた。

「???」「だっ! 団長!!」

カービィ「ぬ?」

フラッフ「どうしたの?」

カービィ「さっきそこら辺からなんか声が…?」

カービィは茂みの方を見て言う。

ワドルディ「誰かいるんスカね?」

カービィ「Let's Go!!」

カービィたちは茂みに向かって歩き出す。

??? 「団長! しっかりしてくださいッチュ!」
??? 「うーん?」

団長らしき人物は起き上がる。

??? 「大丈夫でチュか?」

??? 「あー 大丈夫…っておい! カービィの奴らこっち来てるぞ!」

一同「!」

??? 「隠れろっ!」

ガサガサッ

グーイ「…誰もいないよ?」

カービィ「あれー? 確かに声聞こえたのに…」

??? 「……………」

ワドルディ「これなんスか?」

カービィ「どれ?」

ワドルディが見ている地面には、大きな何かの種が転がっていた。

フラッフ「何かの種みたいだね」

グーイ「それにしても大きい」

大きさはカービィとさほど変わらない。

ブルブルッ

カービィ「わっ！」

種が震えだした。

そして更に少し震えた後、吸い込まれるようにして地面の中に埋もれていった。

ワドルディ「潜っちゃったッス」

ポンッ

種が埋もれた所から芽が出てきた。

グーイ「??」

ニヨキ ニヨキ ニヨキ

芽はどんどん伸び、カービィ15人分ぐらいの高さの豆の木になった。

グーイ「あ、扉」

伸びきった豆の木の頂上には扉が現れていた。

ワドルディ「あれが次のステージみたいッスね」

カービィ「よし、絶対食べ物みつけるぞ！」

4人は豆の木を登り、扉へ入って行った。

ガサガサッ

??? 「ふう 見つかるかと思ったツチュ」

??? 「あのでかい種が俺の頭に落ちてきたんだな」

団長らしき人物は頭を撫でながら言う。

??? 「この小説、何か落ちてくるネタ多いぞ」

??? 「団長、世界観を壊すのはやめるツチュ」

??? 「しょうがないだろ事実なんだから。」

??? 「よし、またあいつらに気付かれないように先回りしてお宝を頂くぞ」

一同「了解!!」

謎の4人組も扉に入った。

謎の4人組とは誰なんでしょう？

きつとほとんどの方がとっくにお気付きかと思いますが…（苦笑

第11話に続く!!

お知らせ

ごめんなさい。

今年は受験生なので更新ができません。

志望校の合格がかなり危ないです。

でも来年からは絶対に再開します。

絶対に、絶対に戻ってきますからよろしくお願いします！

カービー「頭悪いと大変だねえ」

ワドルディ「しょうがないツス 誰もが通る道ツス」

カービー「でもこの国は勉強ブフブランドしなくてもいいよね？」

ワドルディ「そうツスね この国は学制がないツスからね」

カービー「そのぐらい作ればいいのにあのポツチャリ…」

ワドルディ「でも大変ツスよ？ べんきょ…」

???「誰がポツチャリゾイ!？」

カービー「げっ！」

ワドルディ「わーまだ出てきちゃ駄目ッス!! 後々出番があるッス!!」

???「待ちきれんゾイ!」

ワドルディ「こっ今年はこれでおしまいッス! また来年見に来てほしいッス!!……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6647o/>

星のカービィ 毛糸の国の大騒動

2011年10月22日23時17分発行